Akita University

「日本事情」への映像教材使用のありかた†

桑本　裕二*
秋田工業高等専門学校
伊藤美樹子**
秋田大学教育文化学部非常勤講師
宮本　律子***
秋田大学教育文化学部

本稿は，2005年度から2007年度にかけて秋田大学で実施した日本事情Ⅲ，Ⅳの授業の実践報告である．本授業は2006年度まで桑本が担当し，2007年度からは伊藤が担当しているが，二者とも共通して映像教材を使用してきた．筆者らは一貫して，日本文化を教授する「日本事情」に対する映像教材使用の重要性を感じ，ほぼ共通の見解をもって授業を実践してきた．本報告の期間中に授業運営上様々な問題が生じた．そのうちの一つは受講者の激増であり，これにともなってディスカッションの困難さ，レポートの質の劣化などが避けられない状態となり，日本人学生の受講を制限するなどを今後考えていかなければならないと結論づけられた．また，授業での映像使用の基本的な授業での導入に対してもさらに改善すべき点があることを指摘した．

キーワード：日本事情，日本文化，ビデオ教材，DVD

1.　はじめに

本学の教養基礎教育科目である留学生向けの「日本事情」は，背景知識としての日本文化事情を教授する「日本事情Ⅰ，Ⅱ」と，日本文化そのものに焦点を当ててその知識の教授を目的とした「日本事情Ⅲ，Ⅳ」に分けられている（宮本 1995）．「日本事情Ⅲ，Ⅳ」に関しては2003年度以降桑本が授業担当になり，2004年度後期「日本事情Ⅳ」からは映像教材を使用し，映画などのストーリー全体のテーマ，あるいは細部における物品の使用，会話の内容やしかた，登場人物の立ち居振舞いなどのなかに「日本文化」を見いだし考察するという授業を展開してきた．この映像使用の授業の初期のもの（2004年度後期～2005年度）については，桑本・宮本（2006a，b）で報告した．

本授業は，桑本・宮本（2006a，b）の報告以降，しばらくは桑本が担当していたが，2007年度より担当が伊藤に代わった．桑本は桑本・宮本（2006a，b）の報告以後も同様の授業を展開した．伊藤は「日本事情」の担当となるにあたり，前任の桑本による映像を使用する文化の考察という方式を踏襲し授業を展開してきた．本稿は，「日本事情Ⅲ，Ⅳ」の，桑本・宮本（2006a，b）以降となる2005年度後期～2006年度の桑本担当による授業と，担当が伊藤に移った2007年度の授業の実践を通して，映像使用の授業への応用について考察したものである．この間，桑本は自身による桑本・宮本（2006a，b）の報告を受け，受講者増加や評価レポートのあり方など，いく

2008年1月22日受理
† The Significance of using Audiovisual Materials in *"Nihonjijo"*
* Yuji KUWAMOTO, Akita National College of Technology, Akita
** Mikiko ITO, Part time lecturer, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita
*** Ritsuko MIYAMOTO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

Akita University

つかの問題に直面しつつ授業のあり方について様々な側面について考察した．また，伊藤も授業形式は桑本を受け継ぐ形をとりながらも，独自の理念に基づき映像使用の授業導入について創意工夫を施しつつ現在に至っている．桑本・伊藤ともに映像使用の導入についてはほぼ同様の見解を有しており，本稿はそれに基づく授業展開の報告という位置づけでもある．

数年にわたる授業実践の間に，筆者らが本授業をどのように改善してきたか，また，担当が桑本から伊藤に替わるにあたり，どのような工夫をもって授業に取り組んだかについて論じる．実践は2005年度「日本事情Ⅳ」，2006年度「日本事情Ⅲ，Ⅳ」（以上桑本担当），2007年度「日本事情Ⅲ，Ⅳ」（以上伊藤担当）である．

2. 「日本事情」への映像使用の意義（再考）

日本語教育への映像使用の導入に関しては，土井（1997），ラドック（2002），熊谷（2003）などに支持されているが，これらの先行論文は主に言語教育の補助的役割として映像導入を捉えている．たとえば，土井（1997: 45）は身振り手振りや視線などを伴ったコミュニケーション場面の学習に役立つとし，ラドック（2002）はドラマ使用を主に聴覚教育の目的と考えているようである．

本授業では，文化そのものの教授に対して映像使用を積極的に評価し実践したものである．従来の言語教育の補助的役割としてだけではない，新たな視点による映像使用の試みである．

日本の文化項目の理解を目指す場合，これまでに多く行われてきたような講義形式での教授では，日常的で身近なものを取り扱うのは困難である．それゆえ，伝統的なものに片寄ったり，日本人ですらあまり知らない知識を学んだりすることになる．しかしながら，本授業を受講する外国人留学生が求めているのは，日常的に接する日本人とのコミュニケーションを助けるもの，日本で生活する上で必要な身近な情報や知識といったものである．それを理解するためには，日常生活をそのまま映した映像資料を用いるのが最も有効であると考えられる．しかしながら，個人の日常生活を映像に撮り授業で見ていくということは，プライバシーの問題などにより，実現することは難しい．また，撮影できたとしても，なんらかの文化項目に着目して映像を撮った場合，一つの文化項目に絞られることになる．その文化項目というのは，教員，または撮影に携わった者が提示することになり，学習者の持っている興味や関心といったものに十分応えられるとは言い難い．

さまざまな文化項目が織り込まれ，現実の日常に近い形を映像で提示できるものを考えた場合，映画やテレビドラマがあげられる．それらは，それぞれの文化項目が日常的な場面の中でどのように根付いているのかを確認することができ，主人公，あるいは主要な登場人物の視点に立って映像内の出来事や他の人物との関わりを見ることもできる．そのうえ，個々の作品に一貫した話の展開があり[1]，全体を通してのテーマの中にこそ重要な文化項目が潜んでいると考えられる（桑本・宮本 2006b）．また，日常的な会話のやりとりも見られる．

映画よりもテレビドラマの方が，映像に依拠する部分が少なく，自然な台詞まわしや日常的な台詞のやりとりが見られるのであるが，通常のテレビの帯ドラマは，1回約1時間，全10〜12回であり，1回90分，全15回という単位の授業では分量が多すぎる．時間を授業に合わせるために，テレビドラマの中から文化項目をいくつか取りあげ，その部分だけを扱うという方法もあるが，桑本・宮本（2006b）で述べているように，作品全体を通しての文化項目を確認するという趣旨からすれば，断片的に使用することは望まれることではない．さらに，取りあげる文化項目を教員が限定せざるを得なくなり，学習者の視点を限定してしまうおそれがある．

以上の理由により，本授業では日本映画を用いることにした．

3. 実践

3.0.

筆者らは，「日本事情」の授業において，映像資料を使用して日本文化を考えるという同様の方針で実践した．以下で，桑本，伊藤のそれぞれ行った授業について詳述する．

3.1. 桑本の実践

3.1.1. 授業の進め方

桑本の行った「日本事情Ⅲ，Ⅳ」の進め方は，原則的に桑本・宮本（2007a, b）と同様に行った．具

Akita University

体的には次のとおりとなる．

3回分の授業を一つの単位と見なし，はじめの2回分で1本の映画，またはテレビドラマを鑑賞させる．3回目の授業で全体的に，あるいは注目すべき場面を振り返り，様々な内容について分析，考察を行う．

「日本事情Ⅲ」または「日本事情Ⅳ」のそれぞれの科目は半期2単位となっており，いずれも全15回，30時間である．授業内容は以下のとおりである．

表1　各回の授業内容

回数	内容
1	ガイダンス・授業概要説明
2～4	映画1の鑑賞・考察
5～7	映画2の鑑賞・考察
8～10	映画3の鑑賞・考察
11～13	映画4の鑑賞・考察
14～15	映画5の鑑賞

一期の授業では，実質的には映画1から映画4まで4本の映画を取り扱った（映画5の扱いについては後述）．これらの映画の選定条件は以下のとおりとした（桑本・宮本 2006b: 179）．

(1)　長さは90分～150分程度．
(2)　場面設定は現代のものとする．
(3)　できるだけ日常に即した場面設定．

これらの設定の基準については桑本・宮本（2006b）に詳述したが，概略示すと，(1)は授業時間の関係，(2)，(3)は対象とする日本文化の描写の関係について考慮したものである．

授業評価はレポート課題としたが，その内容は，4本の映画のうちどれか一つの作品に関連して日本文化について論じるというものである．その論文の着目点は，映画全体のテーマに関するもの（cf. 桑本・宮本 2006b），物品や言動，風俗習慣など，具体的な文化項目に関するもの（cf. 桑本・宮本2006a）など，その設定については自由とし，また，その授業全体をとおしての考察という内容も許容し，形式は自由とした．

一期の授業では，通常何度かの補講を実施したが，それを連続した時間で組み，「映画5」の鑑賞を行った．この映画は長さ，内容など，上記の選定基準にはずれるものとなったため，評価レポートの対象外としたが，ストーリーを楽しむということや，設定年代，制作年代などの少し異なった映画から得られることも大いにありうるという理由から，参考として開設授業の最後に鑑賞させた．

3.1.2.　使用映像

授業で実際に鑑賞した映画は以下のとおりである．

2005年度・日本事情Ⅳ
- 男はつらいよ・拝啓車寅次郎様（1994）（以下『寅47』）
- マルサの女2（1988）（以下『マルサ2』）
- 世界の中心で，愛をさけぶ（2004）（以下『世界中』）
- 時をかける少女（1983）（以下『時かけ』）
- （参考）八甲田山（1977）（以下『八甲田山』）

2006年度・日本事情Ⅲ
- 男はつらいよ・寅次郎の告白（1991）（以下『寅44』）
- ラヂオの時間（1997）（以下『ラヂオ』）
- マルサの女（1987）（以下『マルサ1』）
- SWING GIRLS（2004）（以下『SG』）
- （参考）日本沈没（1973）（以下『日本沈没』）

2006年度・日本事情Ⅳ
- 男はつらいよ・ぼくの伯父さん（1989）（以下『寅42』）
- タンポポ（1986）（以下『タンポポ』）
- THE 有頂天ホテル（2005）（以下『有頂天』）
- やまとなでしこ（2000）（以下『なでしこ』）[2)]
- （参考）ダウンタウンヒーローズ（1988）（以下『ダウンタウン』）

一連の授業のなかで，かかわるテーマはできるだけ多様性に富むよう配慮した．桑本・宮本（2006b: 180）で考慮した項目は以下のとおりであった．

A. 恋愛と日常
B. 仕事と日常
C. 青春時代の純愛
D. 社会問題との関連

Akita University

2005年度以降はこれを以下のように改変し，それぞれの項目を一期の一連の授業で網羅することに努めた．

a. 恋愛観
b. 仕事のとらえ方
c. 日本社会のしくみ

これらのそれぞれに当てはめられる映画はおよそ以下のとおりとなり，これを上記の各期の映画一覧表と比較すると，a〜c の項目は，各期でそれぞれ網羅されていることがわかる．

a.『寅42, 44, 47』『世界中』『時かけ』『SG』『タンポポ』『なでしこ』
b.『寅47』『ラヂオ』『有頂天』『なでしこ』
c.『マルサ 1, 2』『有頂天』『なでしこ』

3.1.3.　授業を終えての感想

本報告に該当する期間（2005年度後期〜2006年度末）に，計 3 期の授業をしたことになる．この間に受講者は以下のように推移した．

表 2　受講者の推移

	2005 日本事情Ⅳ	2006 日本事情Ⅲ	2006 日本事情Ⅳ
留学生	21	29	25
日本人学生	17	46	112
全受講者数	38	75	137

全受講者数は，回を追うごとにほぼ倍増している．これ以前の当該授業の受講者数はほぼ20〜30名で安定していたため[3]，この時期の受講者の激増に対する予測がつかず，開講当初に使用教室の変更などで奔走しなければならなかった．当時本学には80〜100名以上を収容できる，DVD 機材装備の講義室は稀少で，またはすでに別の授業で使用されており，使用教室の確保が困難な状況であった．機材が備わっていても受像するモニターが部屋の広さの割に小さくて，視聴の際に支障がある場合もあった．

『日本事情』の授業において，日本文化の知識を適切に教授するということを，ディスカッション形式を導入したりしながら展開するというやりかたに対しては，受講者100名を超えるというのはあまりに多すぎるという印象であった．討論形式が非常に行いにくく，教師から学生への一方通行のやりとりになりがちで，また，学生のそれぞれの意見も関連づけにくかった．また，人数が多くなるにつれ，受講学生の緊張感が薄れ，私語など受講態度の悪さが徐々に目立つようになっていった．

また，受講人数の多くなった分，評価レポートの質も劣化したように感じられる．「日本文化について論じる」というテーマがあまりに漠然としているせいか，何をどう書いていいかわからず，ただ授業の感想のようなものをレポート用紙の半分程度書いた程度のものも受講人数の増加に比例して増えた．そのようなレポートに対しては単位不認定とせざるをえなかったが，その人数も全受講人数に比例して増えた．

そもそも，「日本事情」は留学生を対象とした授業であり，授業計画も外国人留学生に合わせてなされている．筆者（桑本）が日本人学生を積極的に受講対象にしてきたのは，日本人にとって，自国の文化を見つめ直すという経験を重視したためと，外国人留学生，日本人学生の双方にとってお互いの異文化理解を授業内でリアルタイムで経験できることをあえて望んだという理由があった[4]．表 2 を見る限り，留学生の受講者は20〜30名で安定しているのに対して日本人学生が急激に増加していることが見て取れるが，ここにきて，受講を許容した日本人学生の多さが様々な弊害の原因になってきているようである．

今後の授業展開において，大人数の受講者に合わせた授業形式を別に選ぶのか，授業の円滑な進行の支障になってきた日本人学生の受講を制限して留学生主体の授業とするべきか，考えていく必要がある．

3.2.　伊藤の実践

3.2.1.　授業の進め方

伊藤の行った「日本事情Ⅲ，Ⅳ」（Ⅳは現在も継続中であり本稿執筆時点において第12回からは予定である）では，各全15回のうち12回を 3 つのテーマに分け，それぞれ 4 回の授業時間を使用して行った．テーマごとに受講者を 6 人の班に分け，映像を見るという以外の活動をそれぞれの班ですすめた．

「日本事情Ⅲ，Ⅳ」の授業内容は以下のとおりである．

Akita University

表3 「日本事情Ⅲ」各回の授業内容

テーマ	回数	内容
	1～2	オリエンテーション
①	3～6	映画1のシナリオと映像を見て，言動や外見的特徴から人物の属性について考える
②	7～10	映画2を参考に日本文化について考え，夏に関することについて発表する
③	11～14	映画3を参考に，学校生活・学生生活について考え，発表する
	15	まとめ

表4 「日本事情Ⅳ」各回の授業内容

テーマ	回数	内容
	1～2	オリエンテーション
④	3～6	映画4を参考に大学生活・大学生について考え，発表する
⑤	7～10	映像を使用しない活動
⑥	11～14	各班の興味のあること
	15	まとめ

テーマ①では，映画『12人の優しい日本人』のシナリオを読み，班ごとに主要な登場人物の中から担当を一人決め，その人物の言葉遣い，行動，持ち物などの描写から性格，属性などについて推測し，全体で発表を行った．その後実際に映像を見て，班での推測は合っていたかどうか，シナリオで抱いた人物のイメージと映像で見る人物のイメージの差異について考察した．また，映像の中で気になった事柄などにも着目し，それについても班の中で話し合いを行った．

ここで取り扱った『12人の優しい日本人』は，日本では行われていない陪審員制を題材にしたものであり，3.1.1.で述べている選定条件(3)「できるだけ日常に即した場面設定。」に反するものである．しかしながら，受講者が日本文化だけではなく，自分自身について客観的に捉えるのに有効だと判断し，対象と考えた．

テーマ②，③，④で行ったおおよその活動の流れは以下のとおりである．1，2，3回では90分の授業時間のうち約40分間テーマに即した映像を見ながら，気になったこと，話し合ってみたいこと，考えたことなどをメモにとり，残りの活動時間で理解を深めるために話し合いをした．話し合いの中で分からなかったことなどがあれば，次の時間までにそれぞれが調べてくるようにした．4回目では，班の話し合いをふまえ，もっと詳しく紹介したいことや班員が強く興味を持ったことについてまとめ，班の中でそれぞれ10分程度の発表を行った．発表後に質疑応答を行い，発表者本人と班員それぞれが評価を行った．

テーマ②では，短編集を用いたため，一つ見終わるごとに班で話し合いを行った．発表課題である「夏に関すること」に関連しない映像も取り扱ったのは，テーマ①では映像の見方について理解できなかった学生が多く，時間の短い映像を使用しながら説明を行ったためである．

なお，テーマ⑤では映像資料を使用しておらず，テーマ⑥は現在も継続中のため，ここでは報告を省略する．

評価は，出席，班活動の際の態度，映像を見ながら取ったメモ，1回目から3回目までの授業ごとに話し合った内容，考えたことなどを記入した用紙，発表の原稿と使用した資料，本人と班員による評価を総合的に見て行った．なお，日本語で文章を書くことが困難な外国人留学生は，発表の内容が薄いものになることが多いが，その学生の日本語のレベルを考慮に入れて評価を行った．

3.2.2. 使用映像

授業で実際に使用した映像は以下のとおりである．

2007年度・日本事情Ⅲ
- 12人の優しい日本人（1991）映画1
- THE JAPANESE TRADITION～日本の形～（2006）（以下『日本の形』）映画2
  「箸」「お盆休み」「夏休み」「お茶」「謝罪」「宴」「手締め」「土下座」「鮨」のみの使用
  （「折り紙」「おにぎり」は使用していない）
- 海がきこえる（1993）映画3

2007年度・日本事情Ⅳ
- ただ，君を愛してる（2006）映画4

2007年度の授業では，初回と最終回に受講者に対しどのような事柄について学びたいかということをアンケートで調査[5]し，それを参考にしてテーマを設定した．そして3.1.1.で述べている(1)～(3)を考慮

Akita University

し，テーマにあったものを選定した．

3.2.3.　授業を終えての感想

本報告に該当する期間（2007年度前期・後期）の受講者は表5のように推移した．

表5　受講者の推移[6]

	2007日本事情Ⅲ	2007日本事情Ⅳ
留学生	31	34
日本人学生	65	34
全受講者数	96	68

「日本事情Ⅲ」では，外国人留学生と日本人学生の割合が約1:2であった[7]．授業の最終回に受講学生に対して行ったアンケート調査では，日本人学生の半数は「日本人学生が多い」「1:1の割合にしてほしい」という意見であった．残りの日本人学生の半数と外国人留学生は「よい」と回答していた．「日本事情Ⅳ」では，外国人留学生と日本人学生の割合は1:1となっている．

学生参加型という形態の授業にしては受講者が多いため，桑本の実践報告を受けて2007年度からは班単位で活動を行って改善を試みた．これにより，学生同士のやりとりが行われ，それぞれの意見も班の中で深められるようになった．大勢の前で自分の意見を出すことに抵抗のある学生も，少人数にしたことによって自分の意見を積極的に出すようになった．また，他の学生の意見を聞いている学生も，質問などをすることができるため，真剣に聞く姿勢が見られた．さらに，班の中での自分の役割を各自が意識するようになり，回を追うごとに欠席者が少なくなっている．

これまで行われてきたレポートを発表に変更したことにより内容も改善されてきた．1度目はインターネットにある情報をそのまま引用したものを読みあげるだけの学生もいたが，聞く側の反応の悪さを直接感じ取ったことで，2度目の発表では改善してくる者がほとんどであった．全体としては，1度目の発表の際に感じた反省点と，他の学生の発表を参考に，2度目の発表では聞く側が興味を持つ内容であるかどうか検討したり，レジュメや画像資料を配布したり，事前に発表の練習を行って本番で原稿をなるべく見ないようにしたりと，しっかりと準備を行うようになり，内容も充実したものに変化している．

4.　結論・今後の課題

「日本事情Ⅲ」では，外国人留学生と一緒に考えたいというよりも，質問があるなら教えてやるといった態度の日本人学生も数名見られた．また，外国人留学生から質問を受けても答えられなかったことについて，そのまま「分からない」で終わり，調べて学習するという意欲のない日本人学生もいた．これについてはテーマ⑤，⑥（3.2.1.表4）で毎週各自が調べてきたことや用意した資料をもとに活動を進めるという授業を行っているところである．学生の自主的な活動を促すためにここではあえて映像資料を提示しなかった．

外国人留学生がなるべく多くの学生（他の国からの外国人留学生，日本人学生）と接することを望み，日本人学生もできるだけ多くの国の文化について触れたいという願望を持っているため，テーマごとに班を変えている．しかし，日本人学生は新しい班での活動になかなか馴染めない者が多い．各テーマの1回目の授業では外国人留学生から「なぜ日本人学生はあんなに恥ずかしがるのか」，「自分と話をするのが嫌なのだろうか」という感想や質問が出される．そのような消極的な日本人学生の態度は日本人の特徴とも受け取れ，日本を理解するには必要なことなのかもしれない．しかし，外国人留学生は不満や不安を抱えており，活動の妨げとなっている．班活動の2回目からは，1回目の活動の際の態度から積極的に活動を進めることができると思われる学生を各班に1人以上入れるようにして対処している．

日本人学生数名は，活動がある程度進んでも自らほかの学生に話しかけることができず，話しかけられるのを待っているだけということもあった．他にも，異性と話すことに抵抗がある学生や，班員が黙り込んでいる者を班活動に交えようと積極的に話しかけても無視するといったこともあった．このような学生は，教員が見回った際にその学生に声をかけたり，班を変えたりしたことで，積極的に参加するようになった．

来年度以降，受講者が増えた場合は，班の数も増えることになる．受講者が増えると，それぞれの学生の活動に対する態度を把握することが難しくなり，積極的に活動する学生を見つけたり，受講者が多い

Akita University

ほど増える活動に参加しない学生に対処したりすることが困難になると予想する．2007年度では，受講者が100人近くいた「日本事情Ⅲ」よりも受講者の少ない「日本事情Ⅳ」の方が，活動に参加しない・できないという学生が少ない．このことと，外国人留学生と日本人学生の適切な割合を考えて，日本人学生の受講希望者が多い場合には人数を制限することはやむを得ないと考える．

設備に関しては，大きなモニターを備えつつ，活動もしやすい可動式の机と椅子がある教室が望ましい．しかし，今のところ本学にはそのような教室がない．大きなモニターがある教室は固定の席であり，班のような少人数に分かれての活動がしやすい机と椅子がある教室は小さなモニターである．現在の授業では大きなモニターが備わっていることを優先して教室を指定している．そのため，班での活動の際に不自然な体勢を強いられたり，活動の途中で席を何度か移動したりすることになる．学生からは，話し合いと映像を見る部屋を変えてほしい，教室をもっと使いやすいところに変えてほしいという意見がよく出される．

映画を使用する問題点は大きく分けて二つある．第一に，全編にわたってテーマに即しているものがないため，テーマに関連しない部分が出てくることである．映像を見る際には，テーマに直接関連しない部分でも文化を考える手だてとなると考えた場合には，活動の中で取りあげてよいということを説明している．しかし，テーマという枠からはずれてはいけないという意識が強い学生は「テーマに関連しない」という理由で映像を何となく見ていることがある．第二に，映像のどのような部分に着目してよいかわからない日本人学生が出てくることである．日本人学生の数名にとっては，映画の中で表現されるしぐさ，やりとり，道具などは「当たり前」のことであり，そこに文化項目があるということに気づけない．また，なんとか文化項目を見つけ出してメモを取っても，話し合いの中で発展させることができない学生もいる．映画に出てくる事象を「作り事」「現実とは違う」という理由で，自らの日常生活に結びつけて考えられない学生もいる．

以上のことから，来年度（2008年度）以降映像を見る際には，ストーリーや設定の説明だけではなく，文化項目に注目する見方，またはその文化項目から広げていくといったことを丁寧に説明する必要があると感じた．短い映像を用いるか，長い映像の場合は使用する映像の始めの10分程度を用いて，メモをどのように取るかという参考例を出しつつ，映像を見ながらどこに着目したらよいか，どのように考えを深めていくことができるかということを全体で教員と一緒に考えるということをしっかりと行い，それから班活動をするようにしたい．

注

1) ドラマ・映画の話題の展開の類型に関しては甲田（2003）を参照．
2) この『やまとなでしこ』のみテレビ連続ドラマである．全放映時間は510分であり，授業での視聴は，あらすじを追う形で場面をとばしながら行った．ストーリーのテーマが若者の恋愛にかかわることと，作品が比較的最近のもの（授業で扱ったのは放映の6年後）であったこと，また，水原（1999）の指摘にもあるように，自然な会話に近いテキストとしては，（舞台演劇などよりも）映画よりテレビドラマの方がより適しているといえることなどから，あえて教材として用いた．しかしながら，後に評価レポートの記述等から，この視聴の仕方は一部の学生にとっては不評であったことが判明した．
3) 同じ内容のこの時期以前の授業は2004年後期（日本事情Ⅳ）から始まったが，2004年日本事情Ⅳ：26名，2005年日本事情Ⅲ：23名だった．
4) 日本人学生を受講対象としての相互的異文化理解の実践授業は，桑本・宮本（2005）で報告している．
5) アンケート調査で希望が多かった内容は以下のとおりである．

外国人留学生
- 日常（大学）生活に役立つこと
- 日本の教育・学校について
- 祭り・四季の行事
- 恋愛・結婚とそれらに対する考え方
- 食生活・食文化
- 人間関係

日本人学生
- 身近な日常生活の違い
- 日本や日本人はどう思われているのか
- 祭り・行事

Akita University

・学校生活
・恋愛
・宗教
・食生活

6) 受講学生数は，単位を必要としない学生も含めた人数である．

7) 「日本事情Ⅲ」では，初回の使用教室に受講希望者が入りきらず，自主的に受講を辞めた日本人学生もいた．それでも日本人学生の人数が多かったため，「日本事情Ⅳ」を履修可能な日本人学生にはそちらに変更するようすすめた．

使用映画資料（タイトル五十音順）

『海がきこえる』
望月智充監督，1993年，ブエナ・ビスタホーム・エンターテイメント（72分）
『男はつらいよ・寅次郎の告白（第44作）』
山田洋次監督，1991年，松竹（104分）
『男はつらいよ・拝啓車寅次郎様（第47作）』
山田洋次監督，1994年，松竹（101分）
『男はつらいよ・ぼくの伯父さん（第42作）』
山田洋次監督，1989年，松竹（108分）
『THE 有頂天ホテル』
三谷幸喜監督，2005年，東宝（136分）
『THE JAPANESE TRADITION～日本の形～』
NAMIKIBASHI 監督，2006年，アスミック（64分）
「箸」「お盆休み」「夏休み」「お茶」「謝罪」「宴」「手締め」「土下座」「鮨」を使用
『12人の優しい日本人』
中原俊監督，1991年，パイオニア LDC（116分）
『SWING GIRLS』
矢口史靖監督，2004年，東宝（105分）
『世界の中心で，愛をさけぶ』
行定勲監督，2004年，東宝・TBS（138分）
『ダウンタウンヒーローズ』
山田洋次監督，1988年，松竹（120分）
『ただ，君を愛してる』
新城毅彦監督，2006年，エイベックス・マーケティング・コミュニケーションズ株式会社（116分）
『タンポポ』
伊丹十三監督，1986年，伊丹プロダクション（115分）
『時をかける少女』
大林宣彦監督，1983年，角川春樹事務所（104分）
『日本沈没』
森谷司郎監督，1973年，東宝（140分）
『八甲田山』
森谷司郎監督，1977年，橋本プロ・東宝映像・シナノ企画（169分）
『マルサの女』
伊丹十三監督，1987年，伊丹プロダクション（127分）
『マルサの女 2』
伊丹十三監督，1988年，伊丹プロダクション（128分）
『やまとなでしこ』
中園ミホ脚本，2000年10月 7 日～12月18日（全11回），フジテレビ系テレビドラマ（DVD-BOX，フジテレビ，510分）
『ラヂオの時間』
三谷幸喜監督，1997年，東宝（103分）

参考文献

熊谷智子（2003）「シナリオのある会話－ドラマの日本語の特徴－」『日本語学』第22巻第 2 号，6-14.
桑本裕二・宮本律子（2005）「双方向型異文化理解の試みとしての「日本事情」」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第27号，87-95.
桑本裕二・宮本律子（2006a）「背景知識の教授をめざした「日本事情」への映像使用」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第 8 号，61-68.
桑本裕二・宮本律子（2006b）「日本映画から考察する日本文化－秋田大学における「日本事情」の実践から－」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第28号，177-185.
甲田直美（2003）「ドラマに見られる話題の展開と構成」『日本語学』第22巻第 2 号，34-42.
土井真美（1997）「映像素材の教材としての利用の可能性－話しことば教育のための学習項目抽出－」『日本語学』第16巻第 9 号，42-50.
水原明人（1999）「作る談話・脚本制作の現場」『日本語学』第18巻第11号，28-39.
宮本律子（1995）「「日本事情」をどう教えるか－秋田大学における実践報告(1)－」『秋田大学教育学部教育工学研究報告』第17号，1-11.

Akita University

ラドック，カレン（2002）「聴解教育・文化学習のためのドラマ使用」『ヨーロッパ日本語教育』no.7, 213-220.

Summary

This is a case study of Japanese Affairs courses *"Nihonjijo"* held at Akita University from 2005 to 2007. Kuwamoto was in charge of these courses until 2005 and Ito took over in 2007. We both used Japanese movies or dramas to watch and to discuss various kinds of topics or items about Japanese culture. There have been some problems to improve the way of teaching. We found the number of students too large. We must consider reduction of students and improve the way of teaching more effectively.

Key Words : Japanese Affairs, Japanese culture, Audio-visual materials, DVD

(Received January 22, 2008)